

智顛における一乗

柏 倉 明 裕

『法華経』譬喩品火宅の譬えに於いて、天台大師智顛は四車家に配される。それは前三車の牛車と大白牛車が異なる理解を示すという理由からである。確かに智顛は両者を異なるとするが、四番目のさらに大きな車となると、我々は何かそのような乗り物が実体的にあるかのようになってしまふ。譬えである以上、それは仕方のないことではあるが、智顛ははたしてそのように理解しているのだろうか。智顛は大白牛車としての一乗をどのように理解し、そのことはどのような意味を持つのかを、明らかにしたい。

智顛にとつて、一乗、一仏乗、一大車、仏性、大乘、仏知見、一大事因縁、直至道場、秘密藏、如、法界、法性、三軌などは、実相の異名として同じである。⁽¹⁾このことを踏まえて、智顛における一乗についての理解を明らかにする。

先ず初めに、智顛は「是の乗、不動不出なり」(大正四六、一二八下)、「此は是れ不動不出の一乗なり」(大正三三、七四三中)と理解するように、この「不動不出」とは、

乗り物として実体的にあるのではなく、動不動、出不出に關係のない乗という意味である。

さらに、乗は衆生を濟度する意味で、御者が車に乗せて運ぶ意味があつても、「復次何必一向以運義釋乘。若取眞性不動不出。則非運非不運。若取觀照資成能動能出。則名爲運。祇動出即不動出。即不動出是動出。即用而論體。動出是不動出。即體而論用。即不動出是動出。體用不二而二耳。」(大正三三、七四二下)と、どうして一向に運ぶ意味で乗を釈す必要があるのかとし、乗について若し眞性軌の面に依れば不動不出なので非運非不運であり、觀照軌資成軌の面に依れば能動能出なので、運と云うことできるも、両者は別々に理解すべきではなく、用に即して体を論ずれば、動出是不動出であり、体に即して用を論ずれば、不動出是動出である。つまり、乗を、体用不二而二として理解する。それは決して乗り物として何か実体的なものがあるではない。智顛は、一乗について眞性軌觀照軌資成軌の三軌として、動出是不動出、不動出是

動出、体用不二而二耳として理解する。

さらに一乗が真性軌照軌資成軌の三軌であることの意味について明らかにしたい。

總明三軌者。一眞性軌。二觀照軌。三資成軌。名雖有三祇是一大乘法也。經曰。十方諦求更無餘乘。唯一佛乘。一佛乘即具三法。亦名第一義諦。亦名第一義空。亦名如來藏。此三不定三。三而論一。一不定一。一而論三。不可思議。不並不別。伊字天目。故大經云。佛性者。亦一非一。非一非非一。亦一者。一切衆生悉一乘故。此語第一義諦。非一者。如是數法故。此語如來藏。非一非非一。數非數法不決定故。此語第一義空。而皆稱亦者鄭重也。祇是一法亦名三耳。故不可單取不可複取。不縱不横而三而一。前明諸諦。若開若合若僂若妙等。已是眞性軌相也。前明諸智若開若合若僂若妙。是觀照軌相也。前明諸行。若開若合若僂若妙。已是資成軌相也。(大正三三三、七四一中)

とあるように、智顛にとつて、三軌が一乗であり、一乗は三法を具足する。この三法は不定の三であり三にして一であり、一も不定の一であり一にして三であり、伊字や自在天の三目のように不並不別不可思議なのが、一乗と三軌の関係である。それは『涅槃經』に於いて仏性が「亦一、非一、非一非非一」と説かれるように、「一であり、一にあらず、一でもなく非一でもない」のが一乗である。つまり、これは一乗なるものが実体的にあるのではないという意味である。また、一乗は、「不可思議」として我々の思議分別心によつて理解してはならず、故に、「單取すべからず、複取すべからず、不縱不横

智顛における一乗(柏倉)

而三而一」と言う。一乗が三軌であるとは、行なき所に一乗は明らかにならず、智なき所に一乗はなく、一乗は単なる教えではなく、己を離れて一乗はなく、己に顕かとなるのが一乗であるという意味である。よつて、一乗は他人事の誰かの話ではない。觀照軌資成軌として智慧や修道実践によつて己に顕かとなるのが一乗である。よつて、智顛にとつて一乗は決して安易な現実肯定やイデオロギーではない。このようなことから、智顛は「一心三智但是一佛乘也」(『三觀義』新統藏五五、六七五中。『維摩經玄疏』大正三八、五二九中)、空仮中の「三法不異具足円滿。名爲一乗」(『法華玄義』大正三三、七八一中)と説く。

智顛は『維摩經玄疏』に於いて乗の義を明かして、六即大乘を説く(大正三八、五三〇中、五三一中)。ここで大乘は一心三智、開仏知見、見仏性、一仏乗と同じとされる。また、『法華玄義』三法妙では六即それぞれに三軌を説き、さらに十法界に三軌を論じ、また、十種類の類通三法を六即に依つて明らかとする(大正三三、七四三下、七四五下)。このように一切諸法が三軌、大乘であることが開かれることは、三軌、大乘、一乗が六即の即の面の、「本有」「性徳」であることを示しており、それが顕かとなる具合に六段階あるのである。本有性徳とは、例えば、智顛がよく引用する『維摩經』の「佛の如も衆生の如も一如無二如」(大正三三、七七四上)の「如」とい

うことであり、如とは「非因果非果。有佛無佛性相常然。遍一切處而無有異爲如」（大正三四、二二八上）としてのあり方であり、修行因果、有仏無仏に関係なく、それをしてそれたらしめる面である。このように、一乗は、本来「仏である」本有を明らかにするのであり、「仏となる」ことをいうのではない。「仏である」ことと「仏となる」ことの違いは本有と修成の違いであり、「なる」は変化してやがて仏となることであるが、「ある」は本来性として修行の因果に関係なくそのまま仏である。智顛にとって一乗は六即の即の面から「仏である」とを説き、しかし、本有面と雖も実体的な根源のことではなく修成と二而不二であり、その本有が三軌として留まることなきあり方にある。

また、智顛は、一切諸法が三軌、仏性、実相、仏道、一乗であることを開くことが大乘であり、絶待妙であり、『法華経』の意であると理解する。「開龜論妙者。低頭擧手積土弄砂。皆成佛道。雖說種種法其実爲一乘。諸行皆妙。無龜可待。待即絶矣」（大正三三、七一六下）「開龜明妙者。世智無道法。尚以邪相入正相。治生産業皆與實相不相違背。低頭擧手開龜顯妙。悉成佛道。（中略）尚開龜入妙即是大乘。（中略）如此開時一切都妙。無非実相。七寶大車其數無量。此是法華會意。即絶待妙也」（同、七一四中下）とあるように、つまり、開龜として、一切諸法の龜が一乗であることを顯かにすることは、

現実の龜のあり方を離れて一乗はなく、一乗は決して他人事の話であつたり、観念ではないことを意味する。開龜を離れて、別に顯妙はなく、一乗もない。現実を離れないとは、どのようなことでもそこに本来性としての三軌が顯かとなることである。それは待対することがないことであり、『摩訶止観』に「絶此諸待。絶即復絶。如前火木名爲絶待。故淨名云。諸法不相待。乃至一念不住故。」（大正四六、二二中）とあるように、火が木を燃やしながら進んで行くように、住することなく、何らかのこととして自分に対することなく、常に現実となつてそのものそれ自体「無前無後、不一不異、不縦不横」なることを意味する。『法華経』の趣意は、この絶待不住にあると、智顛は理解する。それは、決して一乗なるものが待対してあることではない。章安灌頂は大白牛車について「被會絶待之唯一」（『法華文句』大正三四、七〇中）と説く。灌頂が、大白牛車なるものがあるのではなく、開會された絶待という意味での唯一として釈していることは、正に的を射た理解である。智顛の絶待は絶対とは異なり、唯一絶対なる眞実があるというわけではない。

以上、智顛は四車家であるものの、実体的な乗り物として乗を理解しているのではなく「不動不出の一乗」「動出是不動出、不動出是動出、體用不二而二耳」と理解する。「單取すべからず、複取すべからず、不縦不横而三而一」なる一乗

として、我々の分別心に依って一乗を思議してはならない。一乗は、我々に対するものとしての観念的な教えではなく、イデオロギーでもなく、理念や安易な絶対的平等思想でもない。一乗は、三軌として、六即乗として、類通三法として、一切諸法に三法を己に開く開籠顕妙なる絶待妙としてある。一乗は決して自らのあり方を離れず、『法華経』の意は絶待妙として、開籠顕妙にあるとし、絶待でなければ一乗ではないとする。一乗は、三軌不住なる自覚として現実を離れることなく、行としての資成軌、智としての観照軌に拠って顕かとなる。このことは、一乗は単なる道理や教義でもなく、実践止観や智慧なくして一乗はないことを意味し、内外不二でありつつ現実に生きて己を開くことによつて顕かになるのが智顛の一乗理解なのである。故に、一乗や大乘の「乗」は、六即乗として「即」の本有なる面として説かれ、本来「仏である」ことが顕かであることであり、一乗は「仏となる」ことではないと智顛は理解している。智顛に於いて本有とは、根源的な実体ではなく、三軌として留まることなきあり方にあり、修徳と不二である。そして、現実を離れることなく、本有の面から現実のあり方の籠を開くことが大乘であり、一乗なのである。智顛の場合、一乗は、三軌や一心三智、即空即仮即中として、あくまで自らのあり方を離れることなく開き、対することなくそのものそれ自体でありつつ常に今であ

る意味で不住であり、このようなことから一乗は不可思議、三徳秘密蔵、円教無作、絶待妙として説かれ、『法華経』の意も絶待にあるとする。

1 『法華玄義』巻第一下（大正三三三、六九一上）では、一大車、宝乘、直至道場、実相、仏知見、大乘、家業、一地、実事、宝所、繫珠、平等大慧等を異名として挙げ、巻第九上（同、七九二下。七九三上）では、一大事因縁、開仏知見、実相印、大車、一大乗、付家業等を体としての実相の異名として挙げ、他にも、巻八下（同、七八二中下）等も実相の異名を挙げる。『維摩経玄疏』（大正三八、五五八等）では、真性実相、一実諦、自性清浄心、如来蔵、如如、實際、実相般若、一乗、即、首楞嚴、法性、法身、中道、畢竟空、正印仏性、性浄涅槃を異名に挙げる。

〈キーワード〉 智顛、一乗、大乘、仏性、三軌

（大谷大学大学院）